

明治期におけるミクロネシア関係文献

山口 洋 児

はじめに

I. 報告書及び公文書 付私的資料

II. 単行本

III. 雑誌記事

IV. 新聞記事

はじめに

21世紀は、太平洋の時代と云われる。この広大な太平洋に点在する数千の島々からなるミクロネシア(旧南洋群島)が、直接日本との関係を持つことになるのは、通常、第一次世界大戦に日英同盟の取り決めに従って、この地区を日本海軍が占領(1917年)した時に始まると云われる。この占領の結果、ミクロネシアは後に国際連盟の承認のもと、委任統治地南洋群島として、正式に日本の支配下に入り直接日本領としての歴史をふみ出すこととなる。

しかし、この時期以前の時代(明治期)をふり返って見るとき、その中心的な思想の一つであった南進論の流行のもと、数多くのミクロネシア関連の文献が存在することを知らるのである。明治維新の旗の下、近代国家としての第一歩をふみ出した日本の、若々しいエネルギーの噴出とも云える南進論は、世界の激しい植民地獲得競争にも刺激されて、当時の代表的な思想の一つとして発生し、太平洋各地への大きな関心となって現れた。

この時代にあって、虹の様な海外へのあこがれとともに現れた各地域の研究、

レポート、植民論、移民案内は、自由民権思想や言論の自由など新しいジャーナリズムを背景にして花開くのである。

考え方によっては、此等の思想の結果とも云うべき太平洋戦争の終結による南方からの大撤退から40年、再び世界にとなえられる“太平洋の時代”へのステップとして、日本の移植民史の研究や過去の業績の検討と反省が、多くの研究者の関心を引き起こしているのも興味深い。

しかし、最近特に多くなった各方面の学者による素晴らしいミクロネシア研究の成果を見るとき、その引用参考文献は、ほとんど欧米の論文のみであり、近くは、戦前の日本人による研究や著書でさえほとんど無視されてしまっているのも誠に不思議なことである。

日本人によるミクロネシア研究の成果を無視することで、最近の研究の価値が、そがれるものでないことは当然であろうが、日本人による参考文献のリストアップや整理の遅れが、幾多の先哲の業績をそのまま埋れさせてしまっているとすれば、誠に残念なごとと云わねばならない。

もし、此の様な文献そのものの研究整理が、多少なりとも現在の研究者のお役に立つことがあるとすれば、この分野か

も知れないと考えたことが、この拙いリストを発表してみようと考えた理由でもある。

又、この点を考えて、関係参考文献も蛇足ながら付け加えてみた。勿論、此のリストは完成品とは云い難く、多くの誤りをふくむことは当然であるし、大方のご教示を待つ次第でもある。唯、リストアップされた文献については、一つ一つ実物に当たってのチェックはなされていることをご報告する。

残念なことに新聞記事のリストアップは、困難を極め、未だ何分の一もリストアップ出来ていない。之も今後の研究を待つこととなる。

これらの文献リストを実際に参考にする場合を考えて、所蔵リストも必要であるが、之も次回にしたい。唯、これらの文献は、90%以上が国立国会図書館で見ることが出来ることを、付け加えておく。この様な素人の拙い研究に、発表の機会を与えていただいた関係各位に厚く感謝します。

なお、文献を紹介するに当たり、単行本には『 』を、雑誌・新聞論文には「 」でくくって、区別した。

☆ ☆ ☆

I. 報告書及び公文書付私的資料

『外務省御用係後藤猛太郎外一名日本人遭害事実取調及景況視察の爲一マルシャル群島派遣の一件』

(1)一件書類 (2)復命書 明治17、18年

＜一昨年初めて発見された貴重文献
明治17年貿易船エーグ号船長ウオルター・ハーデイより神奈川県に報告が

あり、近年マーシャル群島に漂着の日本人水夫数名が現地人の掠奪殺害に会ったとの事で、この事実の調査の爲、派遣された後藤象二郎の息猛太郎と鈴木経勲による一件関係書類及報告書である。

特に鈴木経勲の筆になる報告書は肉筆彩色のさし絵入りで、外交資料としてのみならず、民族学、動植物学、地理学は云うまでもなく、歴史的にも貴重な文献である。現在は外務省外交史料館所蔵であるが一日も早い一般公開と完全復刻が待たれる。＞

関係参考文献

「100年前からあった日本マーシャル交流」 大内青琥 毎日グラフ 37巻 6号 昭和59

「南洋探検絵図雑感」 大内青琥 太平洋学会誌 22号 昭和59

「極秘報告書を発見」 毎日新聞 昭和59年1月5日夕刊

「明治17年マーシャルに使用して」 鈴木経勲 南洋群島 2巻4号 昭和13

＜他に、明治初期のグアム島に出稼ぎ的に渡った移民関係資料及び此の始末に関する資料等が大日本外交文書などで報告され種々の研究書、出版物に、引用されているが、之等の移民関係資料の原本が何処にあるのか、現在調査出来るのかどうか、などについては報告がなされていない。＞

関係参考文献

『大日本外交文書(4) 明治4年』 外務省調査部 昭和13

『邦人海外発展史』 入江寅次 海外邦人史料会 昭和11 2冊

『邦人海外発展史』 入江寅次 移民局

- 問題研究会 昭和13 2冊
 『邦人海外発展史』 入江寅次 井田書店 昭和9 2冊
 「慶応4年のゴム労役出稼人」 西野照太郎 太平洋学会誌 23号 昭和59
 『明治南進史稿』 入江寅次 井田書店 昭和18 300p
 『日本人の海外活動に関する歴史的調査 南洋群島篇(1)』 大蔵省管理局 昭和22 231p

付. 私的資料

- 「青柳徳四郎交易日記」他書簡等52点
 <初期の南洋貿易商社恒信社のメンバーの一人青柳徳四郎の交易日記で、彼の子孫の所有になる。(福島県白河市青柳幸治氏所蔵)>
 関係参考文献
 『青柳徳四郎交易日記』 青柳幸治自刊 昭和56 259p
 「日本人を国際人にする法」 矢野暢 諸君 昭和56年3月号
 「明治の南洋貿易」 毎日新聞 昭和54年6月18日号
 「貴重な青柳徳四郎の資料」 矢野暢 毎日新聞 昭和54年7月20日夕刊
 「新占領島に於ける日本人活躍史」 海外 4巻45号 大正7
 「維新前後海外発展実譚」 海外 5巻53号 大正8

II. 単行本

- 『南洋時事』 志賀重昂 丸善商社書店 明治20 本文196, 2p
 『南洋時事 3版』 丸善商社書店 明治22 本文205, 2p 附録92, 23p

<時の論客志賀重昂が軍艦に便乗し、太平洋地域の練習航海に参加した時の報告。ミクロネシアに関してはクサイ(現コスラエ)島についての詳しい記述がある。

印刷発行された単行本としてはミクロネシア関係文献第1号に位置付けられている。又、南進論の先駆をなすものとして研究者のよく引用するものである。

3版以後は、増頁され、内容も詳しくなっているので特にリストに入れた。又各新聞等による書評が収録されている。>

関係参考文献

- 「志賀重昂と南洋時事」 土方定一 新亜細亜 4巻2号 昭和17
 『明治の群像6 アジアへの夢』 判沢弘 三一書房 昭和45 232p
 『南進の系譜』 矢野暢 中央公論社 昭和50 220p
 『日本の南洋史観』 矢野暢 中央公論社 昭和54 220p
 『志賀重昂全集 第3巻』 同全集刊行会 昭和2 463p

『南洋群島独案内』 アジ・ハインドレ 横尾東作訳 明治21 98p

<英国人ハインドレの太平洋群島独案内のほん訳ではあるが、本邦最初の邦文でのミクロネシアの地誌も含めた水路誌とも云うべき書である。

訳者横尾東作は南洋群島の貿易商社恒信社の創立者の一人でもある。彼自身も、小笠原諸島や硫黄島などの探険を行っている。

なおマリアナ群島に独特の遺跡ラッテストーンに関して、邦文で記述され

たものでは最初のものである。

各島の緯度経度を詳しく記し、港湾の状況、飲料水の有無等を示しているが中心をなす地域はマリアナ群島である。印刷者は警視庁監獄石川島分署となっているのも興味深い。>

『南洋志』 鈴木経勲口述 野沢藤吉編
 巖川堂 明治23 113p

<鈴木経勲の研究者や、ミクロネシアの研究者も見落としがちな文献であるが、野沢藤吉の筆になると思われる美文調の記述は見事なもの。後述の『南洋探険実記』の前駆をなすものとして重要なものである。存在が非常に稀な資料である。>

関係参考文献

『鈴木経勲』 竹下源之介 大日本海洋
 図書出版 昭和18 284p
 『南洋探険実記』(日本講演協会版) 竹
 下源之介解説 昭和18 402p
 『南島巡航記』(大和書店版) 嘉治隆
 一解説 昭和17 348p

『南洋策 (一名南洋貿易及殖民)』 服部
 徹 三省堂 明治24 142, 2p
 <南進思想研究の題材として必ず引合
 いに出される文献、各島々の地誌とミ
 クロネシア地区の地図が入る。>

『海外殖民論』 恒星盛服 博聞社 昭和
 24 345, 2p
 <南への殖民論とともに、ポリネシア
 地区の中にマリアナ、カロリン、など
 各島の地誌を含む。外務大臣榎本武揚
 の題辞がある。前編が殖民論、後論が
 各島地誌。>

『南洋探険実記』 鈴木経勲 博聞館

明治25 334p

<政府派遣によるマーシャル群島日本
 人水夫殺害実体調査の記録。後に新聞
 記者となる経勲の記述は、単に調査レ
 ポートの境を越え、民族学、動植物学、
 海洋、気象、地理などのレポートとし
 ても詳細をきわめ独特の絵入りで、日
 本初の南洋探険記として文句なしに優
 れたものである。特にマーシャル群島
 に関する記述が多い。>

関係参考文献

復刻『南洋探険実記』(富強日本協会)
 南方情勢社 昭和17 334p
 復刻『南洋探険実記』 日本講演協会
 竹下源之介解説 昭和18 402p
 復刻『南洋探険実記』 森久男解説 平
 凡社 昭和55 286p
 復刻『南洋探険実記』 中島洋解説 創
 造書房 昭和58 334p
 『明治17年マーシャルに使用して』 鈴木
 経勲 南洋群島 2巻4号 昭和11
 『南洋翁回顧談』 鈴木経勲 明治大正
 史談 4~12号 昭和12, 13
 『マーシャル占領予聞』 中田近夫 南
 洋群島 2巻8号 昭和11
 『南洋探険実記』 丸山義二 週刊朝日
 42巻13号 昭和17年
 『明治の群像6 アジアへの夢』 紀田
 順一郎 三一書房 昭和35 pp.
 186~210
 『19世紀の探険レース 南洋探険実記』
 森久男 日本交通公社 昭和57
 『マーシャル群島探険始末の謎』 中島
 洋 太平洋学会誌20号 昭和59
 『日本人の冒険と探検—南洋群島の探
 険』 長沢和俊 白水社 昭和38
 pp. 240~254
 『マルシャル島視察からの帰着』 東

京朝日新聞 明治18年1月29日号
『書評南洋探険実記』 東京朝日新聞
明治25年8月17日号

『鈴木経勲』 竹下源之介 大日本海
洋図書出版社 昭和18 284p

『独領南洋の今昔』 鈴木経勲 海外
1巻1号 大正4年

他に IV 新聞記事の項参照。

『冒険探奇南洋風物誌』 鈴木経勲 大
日本教育新聞社 明治26~27 332
p

＜鈴木経勲による南洋調査航海の時の
風物の報告である。

大日本教育新聞に明治26年8月15日
(326号)から明治27年4月24日(528
号)まで、附録として、連載添附され
たものである。

連載の完了後に、合冊製本される様、
表紙、序、目次まで揃っているが、之
等の合冊本の存在は現在までに拾数種
報告されており、一応書誌学者は単行
本に含める場合が多いが、完本は極め
て少ない。江崎悌三によって復旧復刻
されたものは之等を数種合せて完成し
たものである。

特に当時のマイクロネシアの人々の生
活と、島々の様子、動物、植物などの
さし絵入りの報告は貴重なものでは
ある。＞

関係参考文献

『南洋風物誌』 鈴木経勲 江崎悌三
解説 日本講演協会 昭和19 274
p

『大日本教育新聞』 明治26年8月15
日326号~27年4月24日528号

『冒険探奇南洋風物誌のこと』 小西
泰正 四不像 15号 昭和60

『冒険探奇南洋風物誌のこと』 小西
泰正 四不像 16号 昭和61

『南洋風物誌』 鈴木経勲 書肆八尾新
助 明治26

＜前記の文献の単行本と云われるが、
発行予告は発見されているが、現物は
存在が確認されていない。江崎悌三以
下その発行に疑問を持つものが多く、
現在のところまぼろしの本となっている。

もし、此の単行本が発見されれば、
鈴木経勲研究のみならず、明治期の南
方文献研究の上でも、大きな発見とな
ろう。＞

『南島巡航記』 井上彦三郎 鈴木経勲
経済雑誌社 明治26年 256p

＜明治政府による旧武士救済策として
支出された士族授産金を資本金とし
て、明治23年田口卯吉の主催する南島
商會が機帆船天祐丸によって行った南
洋貿易の経緯と航海及地誌のレポー
ト。井上と鈴木との合著となっているが、
衆目の一致する所、鈴木経勲の筆にな
るものである。経勲の記述は詳細をき
わめ、例の如くさし絵入りである。当
時のスペインによるマイクロネシア統治
の状況や、ポナペ島マタラニームの反
乱の目撃談など貴重な記録が多い。
前記『南洋探険実記』『南洋風物誌』と
ともに経勲南洋三部作として名高
い。＞

関係参考文献

復刻『南島巡航記』 拓務省版 昭和
8 256p

復刻『南島巡航記』 南洋興発版 昭
和11 256p

復刻『南島巡航記』 嘉治隆一解説 大和書院版 昭和17 348p

復刻『南島巡航記』 中島洋解説 太平洋協会版 昭和58 258p

『帆船天祐丸』 丸山義二 萬里閣 昭和16 332p

『南洋貿易50年史』 郷隆 南洋貿易(株) 昭和17 246p

『鈴木経勲』 竹下源之介 大日本海洋図書出版 昭和18 284p

『漂流奇談全集(続帝国文庫)』 石井民司(研堂) 博文館 明治33 1000p
＜石井研堂による過去の漂流の記録集の中に“ペラホ物語”として、江戸後期の貨物運搬船(南部藩)神社丸が台風により遭難、漂流の末パラオ諸島に漂着、約4年間を現地でもした記録である。

現地の記述は、人類学、民族学、気象学等や、東西交渉史の上からも貴重な記録でありながら、何故か近年まであまり研究のされていない資料である。＞

関係参考文献

『太平洋の海洋と陸水』 清野謙次 太平洋協会 昭和18 23p

『異国漂流記続集』 荒川秀俊 気象研究所 昭和39 pp.212~225

『日本漂流漂着史料』 荒川秀俊 地人館 昭和39 523p

『日本人漂流記』 川合彦充 社会思想社 昭和42 pp.121~122,356.

『甲子夜話三篇 6』 東洋文庫 平凡社 昭和58 pp.36~42

『漂流』 鮎沢信太郎 至文堂 昭和31 pp.165~166

『通航一覽続輯 3』 箭内健次 清文

堂 昭和45 737p

『神社丸の漂流民は何処にいたか』 高山純 帝塚山大学論集 48号 昭和60

『人類及人種』 ラング・カーベル 関澄蔵訳 博文館 明治29 558p
＜当時流行の博物学的立場の世界の人種と地誌の解説ほん訳書。

オセアニアの中のマイクロネシア種族として、記述がある。石版画によるさし絵が数葉入る。＞

『マゼラン』 三宅驥一 民友社 明治30 211p

＜マイクロネシア(マリアナ群島)の発見者マゼランの航海記。＞

その後数多くのマゼランの太平洋航海記が出版されているが、おそらくツヴァイクの著作の最初のほん訳ものであろう。＞

『最近探険南洋事情』 西垣次郎 森川五三郎 大沢屋書店 明治32 226p

＜明治30年の米西戦争で、アメリカ海軍の軍艦がスペイン領だったグアム島を占領した。この際の経緯や篠宮龍太郎による南洋諸島の調査と各島誌である。特にグアム島の記述は詳しい。＞

『新式万国地理』 岩崎重三、池田鹿之助 内田老鶴園 明治32 376, 9p

＜此の地理書発行の前に『新編万国地誌』が刊行されているが未見。本書は世界を7州に分けて解説し、第3章太平洋州の項にマイクロネシア群島として、ギルバート、マーシャル、カロライン、マリアーネンなど各諸島の記述があ

る。>

『楽天録(再版)』 田口卯吉 経済雑誌
社 明治34 271, 2p

<前記, 南洋貿易の主催田口卯吉の隨筆集。初版にはミクロネシア関係記事として, 南征行の短歌が2首ある丈であるが, 再版には彼の主催する東京経済雑誌に載せた関係記事を数点収録する。>

関係参考文献

『鼎軒田口卯吉全集 第8巻』 同全集刊行会 昭和4 611, 18p

『復刻東京経済雑誌』 明治文献 昭和50 全63冊

『世界風俗写真帖 第1輯』 坪井正五郎編 東京東洋社 明治34 図版50枚

<サイパンから見世物として来日のミクロネシア人を記録したもの。多分カロリンからの移民と思われる写真で頭部に投石ベルトを巻いているのは珍しい。又メリヤスのパンツに関する記述は微笑をさそう。>

『航南私記』 広瀬武夫 修徳園 明治37 174, 2p

<後年の日露戦の英雄, 広瀬中佐の若き日の練習艦航海記。漢文まじりの美文で, ロタ島, グアム島などについての記述がある。>

関係参考文献

『航南私記』 海軍省教育局 昭和12 153p

『航南私記』 丸山義二編 教材社 昭和17 237, 2p

『広瀬中佐と南洋群島』 海を越えて

1巻8号 昭和13

『航南日記』 富山駒吉 日本移民協会報告(2)~(4) 明治26

『肆拾貳国人物図説』 西川如見 求林堂 明治31 21, 28丁

<享保5年西川如見の著した『四拾貳国人物図説』を子孫が再版したものの中に刺答蘭としてラドローン島の(現在のマリアナ群島)男女の図がある。>

関係参考文献

『刺答蘭』 長谷部言人 人類学雑誌 57巻7号 昭和17

『刺答蘭補考』 長谷部言人 人類学雑誌 58巻5号 昭和18

『太平洋に於ける民族文化の交流』 清野謙次 太平洋協会 昭和19 376, 7p

『南洋諸島の富源』 平山勝熊 隆文館 明治37 250p

<南進論の啓蒙書で南方に於ける各種事業の紹介が中心となる, マーシャル諸島の記述がある。>

『内外地誌』 野口保興 早稲田大学出版部 明治41 1092p

<世界地誌の解説。おせあにあ洲としてミクロネシアの記述がある。附録として, 文部省よりの依頼により外国の地名人名の統一表記を計るべく取調べの復命書があり, 当時のカタカナ, ひらがななどによる外国人名, 地名の表記法があり興味深い。>

<教科書類>

『萬国地誌略三』(文部省 明治9) など一連の地理教科書があるが, ほとん

どが、地図のみで、ミクロネシア地域に関する具体的記述は少ないので省略した。ミクロネシアをマレーシアやポリネシアに含めているものもある。

『南洋群島珊瑚島探検記』 岡雷平 博文館 明治43 303p

＜新聞記者岡雷平が水産講習所の練習船雲鷹丸に便乗して太平洋各島を巡航した航海記である。マリアナ群島、カロリン群島などの記述が当時すでにスペイン領からドイツ領となっていたミクロネシアの風物を新聞記者らしい該博な知識で記している。

なお彼は、日本によるミクロネシア占領後、マリアナ群島にて、事業を行うべく占領軍政庁に申請を出しているが、成功しなかった模様である。15枚の写真がある。＞

『探険と地理学』 野口保興 成美堂書店 明治43 408p

＜早大の野口保興による探険史。マゼランによるミクロネシアの発見などオセアニア各地の発見探険史などにふれている。＞

『外国地理集成 上』 角田成治 隆文館 明治44 832p

＜世界地理案内。オセアニア州の記述あり。＞

『明治44年練習艦隊遠洋航海記念写真帖』 同編参委員 明治45 50p

＜練習艦が太平洋を航海時の記録、グアム島での当時の写真が数葉ある。古いグアムの首都アガニアの風景が珍しい。＞

『独逸に於ける殖民地経済と本国産業』

生産調査会 明治45 197p

＜1910年ドイツ統計局による植民地レポート及統計のほん訳で、当時独領南洋と称されたミクロネシアのものが含まれる。ようやく太平洋にも植民地を得たドイツの発表した植民地経営の実体の報告と将来の展望が興味深い資料である。

なお、明治期に於けるミクロネシア文献を調べるにあたって、そのバックグラウンドとも云うべき、南進思想や、当時の南洋との関係から見た歴史的な明治時代そのものの理解については、次の文献が参考となる。＞

『南進の系譜』 矢野暢 中央公論社 昭和50 220p

『日本の南洋史観』 矢野暢 中央公論社 昭和54 220p

『明治の群像6 アジアへの夢』 判 沢弘 三一書房 昭和45 232p

『慶応四年のゴム労役人』 西野照太郎 太平洋学会誌 23号 昭和59

「明治34年のトラック在住日本人追放事件」 中島洋 太平洋学会誌 23号 昭和59

『弔民坂本志魯雄』 弔民会 昭和7 648p

『横尾東作翁伝』 河東経清 自刊 大正6 218p

『海洋文学と南進思想』 柳田泉 日本放送出版会（ラジオ新書） 昭和17 167

p

III. 雑誌記事

人類学雑誌（東京人類学会雑誌）

「クサイ島の住民 1～3」 山田銈太郎 明治19～20
 「太平洋諸島経歴報告 1～4」 田代安定 5巻48～51号 明治23
 「サモア土人の風俗説 1～4」 田代安定 7巻70, 71, 73, 74号 明治25
 「太平洋諸島経歴余報」 田代安定 7巻75号 明治25
 「太平洋諸島土人器標品解説 1～3」 田代安定 7巻76～78号 明治25
 「南洋諸島に伝はるタブー制の話」 坪井正五郎 8巻86号 明治26
 「トラック島土俗」 坪井正五郎 志賀田順太郎 8巻90号 明治26
 「南洋サイパン島オグレとの対話」 阿部正功 9巻102号 明治27
 「トラック島土俗一斑」 佐藤伝蔵 12巻129号 明治29
 「諸人種の自然物利用」 坪井正五郎 21巻167号 明治39
 「カロリン土人台湾に漂着す」 伊藤嘉矩 23巻260号 明治40
 「カロリン土人を観る」 伊能嘉矩 23巻262号 明治41
 「台湾に漂着したりしカロリン土人」 伊能嘉矩 23巻267号 明治41
 「カロリン土人の詞」 小川尚義 24巻281号 明治42
 「カロリン群島附近の土人の頭形」 鳥居竜蔵 24巻282号 明治42
 「カロリン土人の羽翼舟」 伊能嘉矩 25巻283号 明治42
 「諸人種の小児生活(太平洋諸島)」 坪井正五郎 25巻283号 明治43
 <東京人類学会の機関誌であるが、おそらく最も初期からミクロネシア関係の記事を取りあげた学術誌であろう。(明治19年)この後、大正、昭和となっ

てもミクロネシアへの関心は変わらず、数多くの人類学的、民族学的、考古学的論文を紹介しており、ミクロネシアの研究者にとって重要な文献である。>

関係参考文献

『人類学雑誌総索引』 東京人類学会 昭和13 165p
 『人類学雑誌総索引』(前記の復刻) 第一書房 昭和55 165p
 『日本の人類学』 寺田和夫 思索社 昭和50 266, 28p
 『日本の人類学』 寺田和夫 角川書店 昭和55 296p
 「太平洋諸島経歴報告解題 (1)(2)」 西野照太郎 太平洋学会誌 7, 8号 昭和55
 「田代安定翁を語る」 松崎直枝 伝記 1巻1号 昭和9
 「復刻人類学雑誌」 日本人類学会 第一書房 昭和59 全30巻

植物学雑誌(東京植物学会)

「太平洋諸島巡歴報告 1～4」 4巻38～41号 明治23

関係参考文献

「太平洋諸島経歴報告解題(1)～(2)」 西野照太郎 太平洋学会誌 7, 8号 昭和55
 「田代安定翁を語る」 松崎直枝 伝記 1巻1号 昭和9

日本移民協会報告(日本移民協会)

「南洋の買収」 榎本武揚 1号 明治26

「航南日記」 富山駒吉 2～4号 明治26

<榎本武揚を会長とする日本移民協会

の会報で第1号に南洋群島の買収についての榎本の意見を掲げる。航南日記は練習艦に乗り組んだ富山駒吉の航海日記。 Guam島などの項がある。広瀬武夫の航南私記と重なるものである。他にフィジー、サモアなどの記述がある。>

水交社記事 (水交社)

「南洋事情 1～3」 鈴木経勲 7, 8, 11号 明治23～24

「南洋諸島水路略記」 宮岡百三 10号 明治24

「軍艦比叡マリアナ諸島沖に於ける遭颶記事」 17号 明治24

<南洋事情は例によって経勲のさし絵入りである。あまり一般に知られていないが興味深い報告である。>

今世少年(2) 野蛮島 (大学館) 明治35

「ポ子ビ島の蛮俗」 pp. 101～106

「蛮島踊」 pp. 115～118

「蛮人の結婚」 pp. 118～119

<ポ子ビ島は現在のポナペ島のことで近年ポンペイと呼称が変わった。>

太陽 (博文館)

「南洋風土 (図版)」 志賀重昂 1巻 12号 明治28

「南洋トラック島の現状」 2巻23号 昭利29

「南洋諸島土人所用の器物1～2」 佐藤伝蔵 八木荘三郎 2巻24, 25号 明治29

冒険世界 (博文館)

「遠洋航海記」 鉄面中尉 5巻7号 明治45 pp. 65～74

探険世界 (成功雑誌社)

「一村合宿の蛮島」 増本河南 7巻 5号 明治42 pp. 108～9

台湾時報 (東洋協会台湾支部)

「独領ポナベ島反乱鎮定」 30号 明治30 pp. 23～27

歴史地理 (三省堂書店)

「徳川時代に成れる邦文海外地理書解題(1)(2)」 高槻未知生 19巻2, 3号 明治45

風俗画報 (東陽堂)

「南洋諸島の風俗」 434号 明治45

「独逸領カロリン群島土人の風俗一図版4枚」 434号 明治45

音楽雑誌

「南島の楽器について」 23号 明治25

東京経済雑誌 (東京経済雑誌社)

「南洋経略論」 21巻513号 明治23

「南洋植民会社」 21巻514号 明治23

「南洋植民会社設立の計画」 松尾猪三吉 21巻516号 明治23

「東京府士族授産金に関する紛議」 21巻520号 明治23

「東京府士族」 21巻520号 明治23

「別れに臨み意中を表す」 田口卯吉 21巻521号 明治23

「予は田口君の南洋行を賛助せり」 伴直之助 21巻521号 明治23

「田口卯吉氏南洋へ赴く」 21巻521号 明治23

「南征歌」 田口卯吉 21巻521号 明治23

「田口君の南征を聞いて感ずる所を記す」

Y.K 21巻522号 明治23
 「錢 田口君南洋行」 小幡英之助 21
 巻522号 明治23
 「田口氏南洋行には諸新聞及知己の批
 評」 21巻522号 明治23
 「田口卯吉氏小笠原島に着く」 21巻
 524号 明治23
 「田口卯吉氏の音信」 22巻529号 明
 治23
 「田口卯吉氏の南洋行を遙賀す」 李浦
 逸士 22巻533号 明治23
 「田口氏の帰朝近きにあり」 22巻541
 号 明治23
 「田口卯吉氏の近信」 22巻546号 明
 治23
 「田口卯吉氏」 22巻549号 明治23
 「東カロリンポネビ島の住民の風俗習
 慣並其産物及其繁栄に関して西班牙
 政府の地位大要」 田口卯吉 22巻
 550号 明治23
 「田口卯吉氏帰朝せり」 22巻550号
 明治23
 「南洋航行者の歌」 22巻550号 明治
 23
 「田口氏の南洋談」 22巻550号 明治
 23
 「南洋事情」 22巻551号 明治23
 「ヤップ石貨幣の騒動」 田口卯吉 22
 巻552号 明治23
 「破却せよ箱入息子の主義を」 田口卯
 吉 22巻552号 明治32
 「ポネビに於ける西班牙知事の不遇」
 田口卯吉 22巻552号 明治23
 「田口卯吉氏帰朝の祝宴」 22巻553号
 明治23
 「水夫市川亀吉ポネビに死す」 22巻
 553号 明治23
 「米国人民の働について」 23巻554号

明治24
 「ナイフ一挺にて一島を得たり」 23巻
 554号 明治24
 「ポネビ島パロム邑に於ける土人の牧
 畜」 23巻554号 明治24
 「南洋に於ける日爾曼人の働き」 田口
 卯吉 23巻555号 明治24
 「南洋水路略記」 富岡再三 23巻555
 号 明治24
 「小笠原の現状」 田口卯吉 23巻556
 号 明治24
 「南洋土人の食物料理製菓に就ての断」
 鈴木経勲 23巻556号 明治24
 「南洋貿易事務報告」 23巻556 明治
 24
 「南洋土人の飲料」 鈴木経勲 23巻
 557号 明治24
 「南洋土人の燧火に就ての断」 鈴木経
 勲 23巻558号 明治24
 「東京府土族授産金の授受」 23巻558
 号 明治24
 「東京府土族授産金授受の顛末を明ら
 かにす」 田口卯吉 23巻563号 明
 治24
 「大に力を海外に伸るの策を行うべし、
 商利国防勉めずして成る」 23巻565
 号 明治24
 「南洋遺聞」 鼎軒逸人 23巻565号
 明治24
 「グワムの闘鶏」 23巻565号 明治24
 「南洋諸島の煙草の断」 鈴木経勲 23
 巻565号 明治24
 「南島王」 鼎軒逸人 23巻565号 明
 治24
 「南洋ポネビの通信」 23巻568号 明
 治24
 「南洋ヤップの踊」 鈴木経勲 23巻
 568号 明治24

「天祐丸売却の顛末」 田口卯吉 23卷
568号 明治24
「南洋サモワール島の土人の踊」 鈴木經
勲 23卷569号 明治24
「珊瑚虫の説」 鈴木經勲 23卷572号
明治24
「峰岸繁太郎氏の履歴」 23卷574号
明治24
「サロモン島の踏舞」 鈴木經勲 23卷
574号 明治24
「南島の石貨に就て」 細川兼太郎 23
卷577号 明治24
「マリヤナ列島土人の農業」 鈴木經勲
23卷579号 明治24
「南洋ポネピ通信」 24卷583号 明治
24
「峰岸繁太郎氏の消息」 24卷584号
明治24
「南洋の貿易」 24卷585号 明治24
「船政の改正を要す」 24卷585号 明
治24
「新船を造るの説」 田口卯吉 24卷
585 明治24
「赤道直下の暑中は日本より涼しき理
由」 24卷585号 明治24
「南洋貿易」 24卷587号 明治24
「マジロ島の鳥獵器械」 鈴木經勲
24卷594号 明治24
「チューの嘯」 鈴木經勲 24卷597号
明治24
「南洋の水産」 田口卯吉 24卷601号
明治24
「田口氏の一行樹皮を以て雨具となす」
鈴木經勲 24卷602号 明治24
「タヒチ島の婦人」 鈴木經勲 24卷
603号 明治24
「マジロ島人の鳥獵器械に付きて」
坪井正五郎 25卷606号 明治25

「南洋サモア島王の家」 鈴木經勲 25
卷605号 明治25
「ニウヘベリデス島」 田口卯吉 25卷
620号 明治25
「南洋諸島の貿易状態」 65卷697号
明治45

＜明治政府により旧武士の士族救済の
為に出された授産金を資金として、田
口卯吉等によって企てられた南島商会
による南洋貿易行の關係記事を、田口
の主催する東京經濟雜誌に報告及び記
事として記載されたものである。田口
卯吉、鈴木經勲等の執筆が多い。この
南洋航海は明治23年5月～12月の約6
ヶ月に渡って、グアム島、ヤップ島、
パラオ島、ポナベ島などを巡航して、
貿易を行ったものであり、機帆船天祐
丸によって行われたこの航海の記録が
後日『南島巡航記』として出版された
ものである。＞

關係参考文献

復刻「東京經濟雜誌」 明治文献 昭
和50 全63卷
『樂天録』 再版 田口卯吉 經濟雜
誌社 明治34 209p
『鼎軒田口卯吉全集 第8卷』 同全
集刊行会 昭和4 611,18p
「グアム島の精査 1～4」 鈴木經
勲 海外 1卷3～8号 大正4

東京地学協会報告（東京地学協会）

「マルシャル群島の話 1～2」 鈴木
經勲 10卷11号, 11卷3号 明治21
「マルシャル群島の話原稿買取りの件」
11卷3号 明治22
「マルシャル群島の話 3～6」 11卷
5～7, 9号 明治22

「太平洋諸島経歴報告 1~15」 田代安定 11巻11~12号 明治22, 12巻1, 2, 5, 7, 9号 明治23, 13巻4~12号 明治24

「南洋事情大意」 田口卯吉 12巻8号 明治23

「南洋貿易及植民」 田口卯吉 12巻10号 明治23

「トラック島事情話」 15巻1号 明治26

東京地学雑誌（東京地学協会）

「マリアナ群島略誌 1~4」 田中阿歌麻呂 11巻128号 明治32,

12巻135号, 141, 144号 明治33

「独逸の南洋新版図」 11巻128号 明治32

「ガム島の大地震」 15巻169号 明治36

「ヤップ島」 15巻169号 明治36

「ロタ島」 15巻170号 明治36

「カロリン群島ポナベ島新測量」 17巻202号 明治38

「本邦グアム間海底電線」 18巻209号 明治39

「アガナの気候」 18巻211号 明治39

「カロリン群島中新設の气象台」 19巻220号 明治40

「独船プラネット号第一回海洋学及気象学上事業」 19巻221号 明治40

「ヤップ島」 19巻224号 明治40

「プラネット号探検第二報」 19巻228号 明治40

「プラネット号太平洋探検」 22巻259号, 23巻272号 明治43

<明治期に於て、マイクロネシアに最も興味を持った学術団体の一つが、東京地学協会と云える。従って、マイクロネ

シアに関する雑誌記事も最も多い。中でも、大きな成果と云えるものが、鈴木経勲の「マルシャル群島の話」であり、田代安定の「太平洋諸島経歴報告」である。

両報告は当時の外地レポートとしては出色のものと云えよう。なお、鈴木「マルシャル群島の話」の原稿買取り出版の話はその後、実施された記録はない。

「東京地学協会報告」は後に「東京地学雑誌」となっている。>

関係参考文献

田代安定、鈴木経勲などの文献については東京人類学雑誌、植物学雑誌、東京経済雑誌、水交社記事などの項を参照されたい。

博物学雑誌（動物標本社）

「まりやな群島さみばん土人ニ就テ」

鳥居竜藏 第3号 明治31

<浅草公園に見世物として来日したサイパン島々民の調査レポート。写真版はおそらく、日本で印刷されたマイクロネシア人写真の初期のもので、7頁の『世界風俗写真帖第1輯』と同じものである。>

IV. 新聞記事

東京横浜毎日新聞

「マルシャル群島にて日本人水夫殺害」 明治17年7月22日号

「マルシャル群島ノ蛮民日本人ヲ虐殺ス」 明治17年7月23日号 関連記事 明治17年7月29, 31日号

「明治17年の大事記」(7) 明治18年1月11日号

「マルシャル群島より帰朝」 明治18年

1月21日号

「マーシャル群島の新報」 明治18年1月28日号, 1月29日号
＜『南洋探険実記』の項参照。マーシャル群島日本人殺害事件の関連記事＞

東京朝日新聞

「マルシャル島視察からの帰着」 明治18年1月29日号
「書評 南洋探険実記」 明治25年8月17日号
「社説 先取又先取」 明治25年9月30日号
＜『南洋探険実記』の項参照＞

大日本教育新聞

「冒険探奇南洋風物誌」 明治26年8月15日(326号)より27年4月24日(528号)まで
＜連載附録として発行されたもので、前記II単行本の項『南洋風物誌』の項参照。＞

扶桑新聞(名古屋)

「南洋土産噺」 鈴木経勲
(1)南洋土産噺 明治26年11月5日,
(2)土人の木燧 11月9日, (3)土人の伐木法 11月10日, (4)パリー山 11月11日, (5)(サブタイトルなし) 11月12日, (6)マーシャル群島の男子と抛鎗 11月14日, (7)マログラップ島の土人人肉を喰ふ 11月15日, (8)サワイ島土人の独木舟及漁獵 11月16日, (9)ポ子ピ島婦人とバナナ 11月17日, (10)ポ子ピ島の男子 11月18日
「ポ子ピ島戦争実記 1~26」 鈴木経勲 明治26年11月19日, 21~23日, 25~26日, 28~30日号, 12月1~3

日, 5~10日, 12日, 14~17日, 19~21日号

「パラオ島の父老幼児に形象字を訓読する図」 明治26年12月26日号
「大トカゲ ボーシン鳥図」 鈴木経勲 明治27年1月27日号
「南洋貿易東海丸の出帆」(社説) 鈴木経勲 明治27年5月17日号
＜名古屋の扶桑新聞社に記者として招かれた鈴木経勲の筆になるもので、各回とも彼の自筆になるさし絵入りである事も興味深い。ポナペに於ける反乱の記事は現地報告としてジャーナリストによって書かれたものの最初である。なお、この記事についても複製されたものはなく、一日も早い複製が待たれる資料の一つである。＞

関係参考文献

『鈴木経勲』 竹下源之介 大日本海洋図書出版社 昭和18 284p
「独領ポナペ島反乱鎮定」 台湾時報 30号 明治30
「志賀重昂『南洋時事』の書評」 朝野新聞 明治20年5月23~25日号
その他日付が不明であるが掲載された新聞及雑誌 報知新聞, 毎日新聞, 国民の友, 時事新報, 函館新聞, 北海新聞, 金城新報, 読売新聞, 改進黨新聞, めざまし新聞, 通俗学芸誌林, 東京経済雑誌, 出版月評
＜『南洋時事, 増補第3版』の項参照。＞

(やまぐち・ようじ ㈱アサヒトラベルインターナショナル)